

高崎市文化財調査報告書第150集

島野一ツ谷東Ⅰ遺跡

都市計画道路南八幡京ヶ島線(京ヶ島工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1 9 9 7

高崎市教育委員会

序

このたび島野町一ツ谷地区におきまして都市計画街路事業の一環であります南八幡京ヶ島線の建設が実現の運びとなりました。近年、高崎市が積極的に推進しております公共事業の一つであります。完成の暁には、交流拠点都市としての役割をさらに充実させるものと期待されております。

これらの積極的な開発事業は高崎市の発展のために必要不可欠なものであります。しかし一方では、貴重な自然環境や遺跡を破壊しかねない側面をあわせもっているということも目をそらすことのできない事実であり、その実施は、将来を見据えた構想に基づく慎重なものでなければなりません。ふと気づけば、すでに急激な開発の波のなかで、その姿を目まぐるしく変えつつあります。当島野地区におきましても例外ではありません。

こうした中であって、高崎市における文化財保護行政は、市民、国民共有の財産である文化財を保護し、後世に継承していくという、重大な責務を果たすことを前提に協議を重ね、調和のある解決策を模索し、慎重な対応を行ってまいりました。なおやむを得ず破壊される遺跡を対象に、事前の発掘調査を実施しております。

本書はこうした発掘調査の成果をまとめた報告であります。

刊行にあたり、事業の円滑な遂行にご協力いただきました皆様方に、感謝の意を表しまして序といたします。

高崎市教育委員会

教育長 砂田 威夫

例 言

1. 本書は平成7年度に実施された都市計画道路3・4・22南八幡・京ヶ島線（京ヶ島工区）建設に伴う、島野一ツ谷東Ⅰ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は高崎市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係が担当した。
3. 当市教委では、平成7年度には上記1と並行して島野大岩Ⅱ遺跡、平成8年度には島野大岩Ⅲでも発掘調査を実施している。これらは北から島野一ツ谷東Ⅰ遺跡、島野大岩Ⅱ遺跡、島野大岩Ⅲ遺跡の順に並び、連続する一連の遺跡であるが、予算体系上分割されることになったものである。本書はこのうち、島野一ツ谷東Ⅰ遺跡分についてまとめたものである。
4. 本遺跡の高崎市遺跡調査番号は265である。
5. 平成7年度発掘調査（島野一ツ谷東Ⅰ遺跡）
 - (1) 調査対象地 高崎市島野町一ツ谷東1080、1080A、1082、1084、1092、1093に所在する。
 - (2) 調査面積 2,176m²
 - (3) 調査期間 平成7年5月26日～平成7年11月10日・平成8年1月17日～3月25日
 - (4) 整理期間 平成8年6月3日～平成9年3月25日
 - (5) 調査組織（事務局） 浅田 勲、神戸聖語、村井田雅明、茂原久美子
（調査担当） 久保泰博、曾江哲也
 - (6) 委託業務 基準点測量、方眼杭測量、水準測量・・・(株)測研
空中写真撮影・・・・・・・・・・・・(株)青高館
7. 報告書作成
 - (1) 本書の編集・執筆は久保泰博、曾江哲也が分担して行った。
 - (2) 整理作業、遺物の実測、トレース、その他本書編集上の諸作業は、担当者の指示の下に、秋山正子、秋山道子、川上栄一、信沢百合子、広瀬清一が行った。

発掘作業には、上記の7(2)の他、下記の臨時職員が従事した。

天田シズノ、五十嵐次男、石原義男、伊藤 澄、井上幸雄、今井康久、岩田ハヤ子、太田光雄、樺沢源三郎、近藤四郎、桜井幸江、佐藤重太郎、田島いつ江、立川 茂、登坂芳英、長井幾代、永井ツヤ、永井寛子、桃井とみ子、矢部勝美、山内三好、吉井まさ代

出土遺物並びに調査資料及び事業記録は、一括して高崎市教育委員会が保管している。

凡 例

- ・本書に使用した地図は、1／2,500高崎市都市計画図と、建設省国土地理院発行の1／25,000地形図である。
- ・挿図中に示された座標値は国家座標第Ⅸ系を使用している。
- ・挿図中の北は座標北を示す。
- ・土層及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』を用いた。
- ・本書において表記されている主なテフラの名称とその降下年代は以下の通りである。
なお、表記及び年代については、『火山灰考古学』（1993年 新井房夫）に従った。

表記	名称	降下年代
As-A（A 軽石）	浅間 A 軽石	1783年（天明 3 年）
As-B（B 軽石）	浅間 B テフラ	1108年（天仁元年）
Hr-FP（F P）	榛名伊香保テフラ	6 世紀中葉
Hr-FA（F A）	榛名渋川テフラ	6 世紀初頭
As-C（C 軽石）	浅間 C 軽石	4 世紀中葉

目 次

序	
例言	
凡例	
第 1 章 調査に至る経緯	1
第 2 章 地理的環境・歴史的環境	1
第 3 章 調査の内容	2
写真図版	

挿 図 目 次

1 区平面図	4
2 区平面図	5
3 区平面図	8
3 区 2・3 面平面図	11
出土遺物	13－15

第 1 章 調査に至る経緯

本事業は、南八幡と京ヶ島地区の島野町間を結ぶ都市計画道路の建設工事に伴うものである。本調査の対象地は、この区間中の平成 7 年度工区分のうち、一ツ谷区分を 1 区分として扱うものである。

高崎市が都市計画街路事業の一環として建設計画を立てた南八幡京ヶ島線は、平成 6 年度までに倉賀野町、柴崎町、南大類町、宿大類町等で部分的に施工が実施され、一部供用が開始されている。島野地区においても同路線建設が計画された。

当地区ではすでに西側に近接する西島地区における土地改良事業及び周辺での開発に伴い、西島遺跡群の発掘調査を実施したのを始め、大岩Ⅰ遺跡、京目不動西遺跡等で発掘調査を実施している。今回の工事着工を予定した平成 7 年度京ヶ島工区分はその近隣に連続する位置に当たる。

島野町には古墳時代から近世、近代に至るまでの遺跡が複合して存在し、周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。本路線予定地は、現在の駒形線から北へ伸びるおよそ420m 区間のうち、北側の140m、幅員20m分である。予定地内には、浅間山噴出の B 軽石の散布が確認され、同軽石下の水田遺構の存在が確実視されていた。昭和58年ごろから実施されていた土地改良事業に伴う発掘調査では古墳時代から奈良・平安時代の集落が確認されているのを始め、国道354号（高崎第二工区）道路改良工事等、本地域内に計画された開発に伴って実施された発掘調査において、種々の遺構遺物を検出した地域と隣接する位置に当たる。

上記のような歴史的環境と、発掘調査の推移を踏まえ、市の関係部局において、建設事業の円滑な施工と可能な限り遺跡を破壊から保護することを前提とした上で、協議、調整を重ね、なおやむを得ず破壊を受ける部分について発掘調査を実施し、記録保存を行うとの方針を立てた。

第 2 章 地理的環境・歴史的環境

高崎市は関東平野の北西部にあり、北には赤城山、北西には浅間山、榛名山等の山々を望む位置にある。これらの山々を水源とする中小の河川が市内を北西から南東へと貫流している。

本市の北部は、榛名山麓南面の裾野の一部にあたり、更に南側に広く展開する前橋・高崎台地と総称される台地上に立地している。

本遺跡は、この高崎市の東部にある島野町一ツ谷東地区に所在する。

遺跡地の北東約 3 kmには利根川があり、北方約 1 kmには井野川が南東流している。一方、南約 3 kmには烏川が流れている。両者は、南東約 5 kmの地点で合流し、烏川は前橋台地と本庄台地を二分しながら更に南東に水運び、利根川に合流している。

井野川の下流右岸には、2 段の河岸段丘が形成されている。1 段目は南大類、下大類、柴崎、綿貫、2 段目は柴崎、矢中栗崎、台新田を乗せる段丘である。

段丘上には、更に数条の微高地部と低地部とが、段丘におおむね平行に、北西から南東に向かって緩やかに標高を下げている。本遺跡はこの井野川河岸段丘の 1 段目のほぼ中央部に位置する。

調査区北端は、西方向に弧状に突出した微高地の先端部にあたる。北側は低地で、西側も約 8 ～10m で低地となる。現在、北側に広がる低地内には、近年改修された一貫堀川が上大類町から南大類町を経て直線的に走行し、下大類町で、井野川と合流している。一貫堀川開析以前の低地内には著しい蛇行を示す白川の旧流路があり、本調査区北端付近を北西から接近してきた白川が北東へ方向を変えるために、南に大きく湾曲して張り出した部分に当たる。河川改修後の一貫堀川の両岸には段差を伴う著しい蛇行の跡が残っていたが、昭和62年の土地改良工事によって平坦化され、現在では僅かに地形や区画にその名残をとどめるのみである。

本調査対象地は、この一貫堀川の南40m 地点と、更に南の旧国道354号線（高崎－伊勢崎線）北辺とを結ぶ160m区間であり、おおむね北西から南東に伸びる低地と微高地を複数含んでいる。

第3章 調査の内容

1区、2区、3区の3箇所に調査区を分割して調査を行った。3つの調査区は南に連続し、それぞれ浅間B軽石の堆積が確認されている。軽石下からは平安時代の水田が検出され、方形に区画された畦が良好に調査された。また浅間B軽石上から掘り込まれた近世・近代を中心とした多数の溝があり、ほぼ南北方向に掘られたものと、少し角度を振ったものの2群に大別が可能である。調査区内では角度の傾く溝の方が時期の古い遺構となっているようである。

検出された畦の方位は、ほぼ東西南北方向であり、規格的な構造であるといえる。畦の高さは10cm以上の比較的高いものと2～3cmの低いものに分かれるようであるが、全体的に低いものが多い。また1区の5号畦が4号畦と交差した先に伸びていないこと。同様に1区の7号畦と交差した先に伸びていないことは、T字型の構造を持つ部分も存在し、それによって東西方向に広い水田面が何面か存在する構造になっているようである。

1 区の概要

調査区全域にわたって浅間B軽石層が確認できた。B軽石は、地表から15～40cmの位置で確認でき、約5～8cmの厚さで堆積していた。検出遺構は、このB軽石に埋没する水田と、B軽石を掘り込む溝及び土坑である。

1 区検出遺構の概要

1 浅間B軽石下の水田遺構

検出された水田面は、ほぼ平坦であるが、北西から南東へ向かってわずかに傾斜している。標高は調査区北西部で約89.600m、南東部で約89.500mである。

畦は、水田面との比高が比較的明瞭なものと、低平なものがある。便宜的に交点間に付けた番号（畦番号）では7を数える。

南北方向の畦は1号畦、及び5号畦である。

1号畦は調査区西端で検出された。この畦は調査区中央で5号溝及び9号溝によって破壊されており、この先更に南に伸びていくのかどうかを確認することはできなかった。

5号畦は調査区東側中央部付近のX =38,220付近から4号畦に連続して始まり、南端のX =38,200付近で7号畦に交差して終わる。この畦より北へも南へも南北方向の畦は連続していないと考えられる。従って、この畦の北及び南の水田面は東西方向に広い形態を示している。

東西畦のうち、2号畦を除く3号・4号・6号畦は、調査区西側が途切れているが、これらは、実際に畦が途切れているのか、溝の攪乱や表面の攪乱などにより検出できないのか調査時から明確にできなかった。また、6号畦のみ他の畦と比較してやや角度を異にしているのが特徴的である。

畦で区画される水田面は、10面前後になるものと考えられるが、畦の区画が明確でないため、確定できない。検出畦の概要は次のとおりである。

1号畦 a =幅0.7～1.2m、高さ16～24cm

1号畦 b =幅0.9～1.0m、高さ4 cm

1号畦 c =幅は不明 高さ2～3 cm

2号畦 a =幅1.0～1.5m、高さ9～10cm

2号畦 b =幅1.0～1.4m、高さ2～4 cm

3号畦 =幅0.9～1.3m、高さ4～5 cm

4号畦 a =幅0.9～1.4m、高さ3～7 cm

4号畦 b =幅0.7～1.0m、高さ2 cm

5号畦 a =幅0.8～1.1m、高さ2～4 cm

5号畦 b =幅0.9～1.4m、高さ4 cm

6号畦 a =幅0.8～1.2m、高さ3～4 cm

6号畦 b =幅0.8～1.0m、高さ6 cm

7号畦 a =幅0.9～1.1m、高さ4 cm

7号畦 b =幅0.8～1.2m、高さ4 cm

2 溝

調査区内を縦、横、斜めに走向する溝は全12条。すべて中世及び近世・近代・現代のもので、平安時代水田に時期的に同一なものはない。検出した溝の概要は次のとおりである。

1号溝＝幅1.8～2.0m、深さ0.18m、現代の側溝

2号溝＝幅0.5～0.7m、深さ0.2～0.6m、近代～現代の溝

3号溝＝幅0.6～0.9m、深さ0.8～1.2m、近代の溝

4号溝＝幅0.6～1.2m、深さ0.11m、現代の水路

5号溝＝幅0.7～0.8m、深さ0.23～0.25m、18～19世紀代の溝

6号溝＝幅0.6～1.0m、深さ0.2～0.25m、18～19世紀代の溝

7号溝＝幅0.7～0.8m、深さ0.14m、18～19世紀代の溝

8号溝＝幅1.5～3.8m、深さ0.18～0.25m、中世の溝

9号溝＝幅0.7～1.2m、深さ0.1～0.5m、時期不詳

10号溝＝幅0.3～0.7m、深さ0.7～m、18世紀代か

11号溝＝幅0.2～0.3m、深さ0.14m、時期不詳

12号溝＝幅0.3～0.4m、深さ0.5m、時期不詳

2 区の概要

1区の南側に続く調査区である。本調査区でも、全域にわたって浅間B軽石層が確認された。B軽石は地表から20～40cmの深さで検出され、約5～10cmの厚さで堆積していた。

検出遺構は、このB軽石に埋没する水田と、B軽石を掘り込む溝及び土坑である。

なお、検出遺構の遺構番号は、各調査区ごとに発見順に1から起算しているため、連続する1単位の遺構であっても、検出した調査区により別な番号がついている。

2 区検出遺構の概要

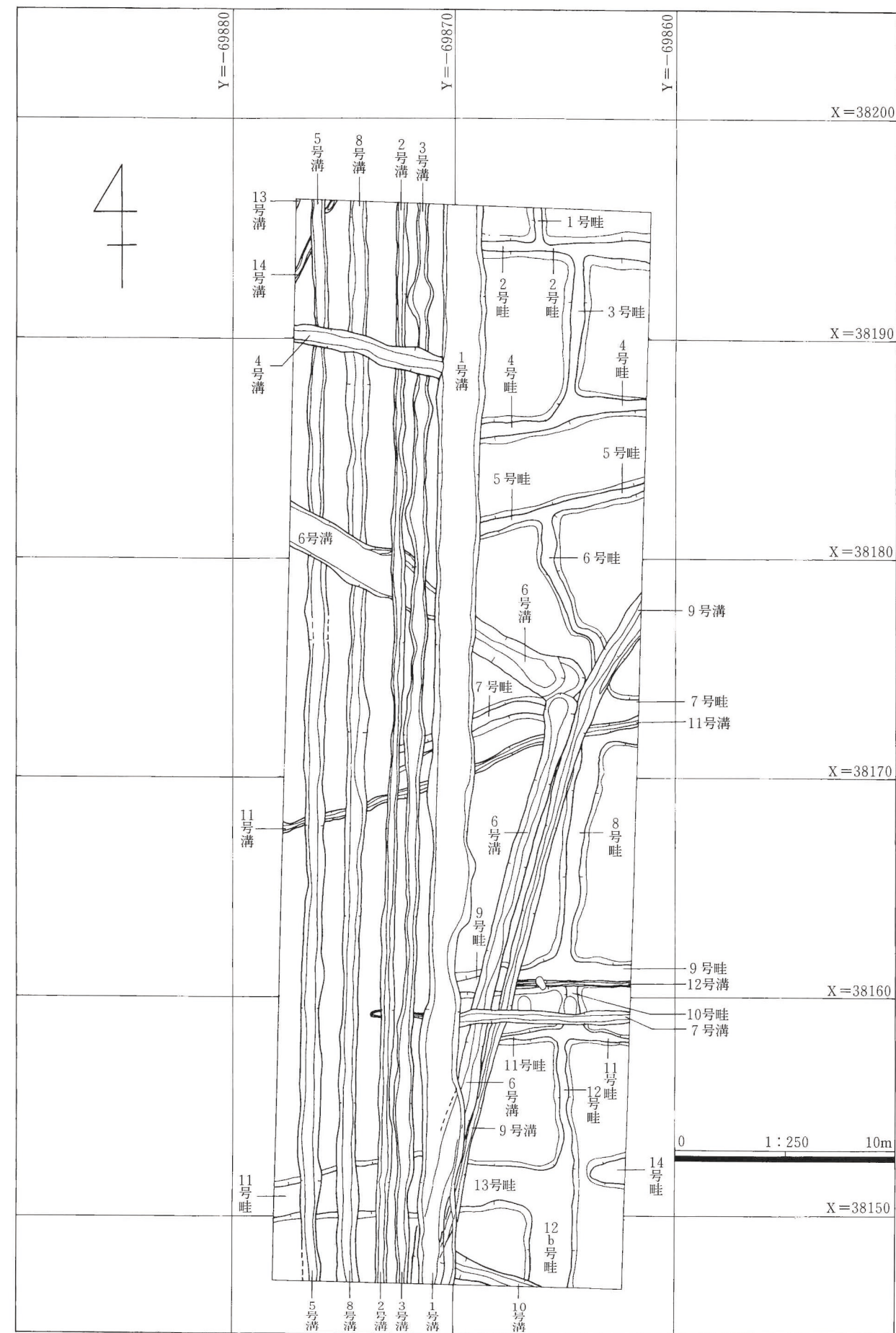
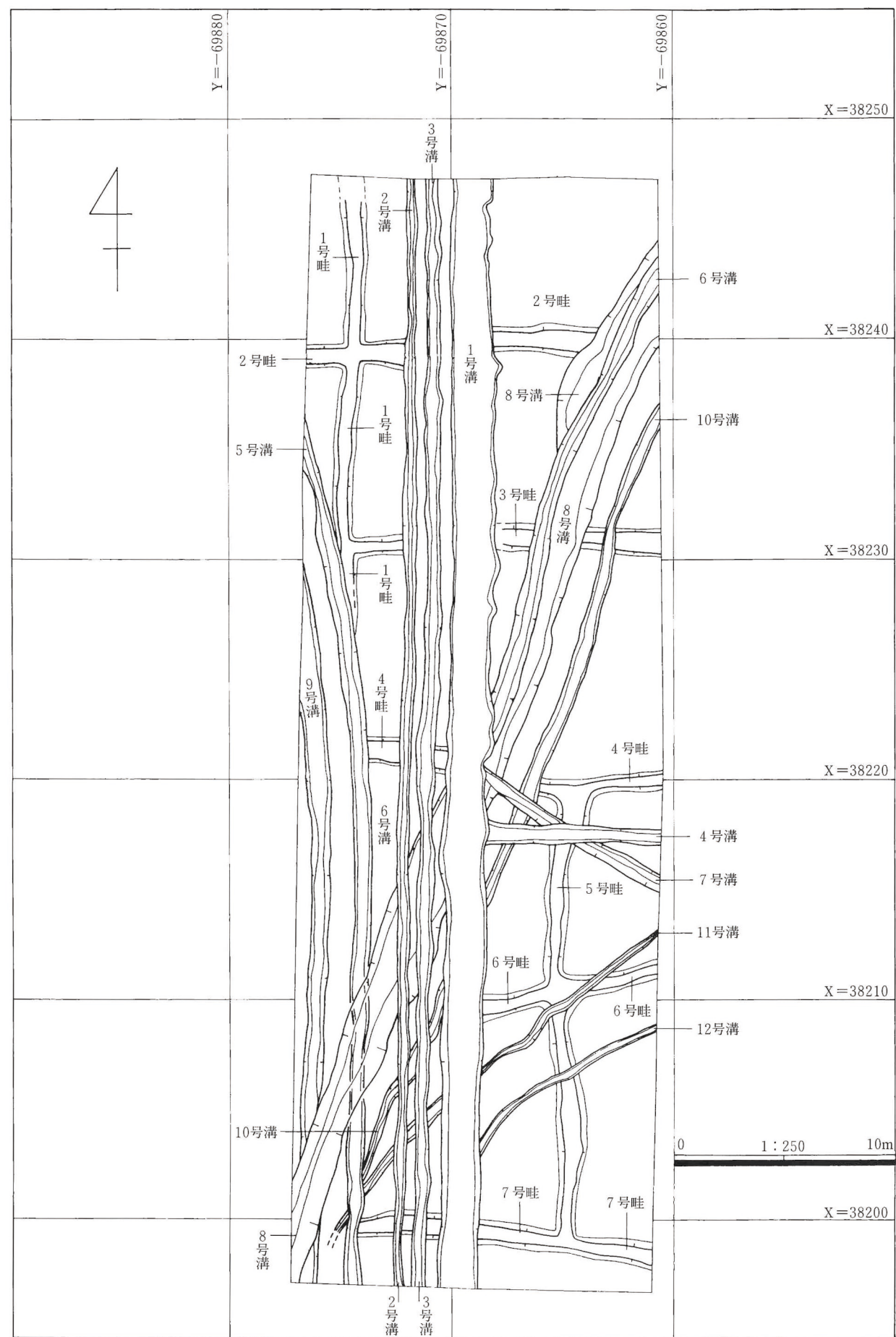
1 浅間B軽石下の水田遺構

検出された水田面は、ほぼ平坦であるが、北西から南東へ向かって緩く傾斜している。標高は調査区北西部で約89.500m、南東部で約89.300mである。

畦は、水田面との比高が比較的明瞭なものと低平なものがある。高いもので高さ10～20cm前後、低いものでは1～2cm前後となる。便宜的に交点間に付けた畦番号では14を数える。

南北畦は、東側で検出した1号・3号・6号・8号・10号・12号畦であり、他は東西畦であるが、7号畦は他と比較してやや南西に振れている。

14号畦は西端が切れており、水口であったと推定される。13・14号畦は12号畦bと共に幅1.8～3.0mで、高さ



も10cmから20cmと、他の畦と比較して作りが大きい。

なお、東西畦は調査区西側では南北走向する溝で畦が寸断されており、溝以外の面における畦は不明瞭であり、ほとんど検出できなかった。

畦で区画される水田面は、15面前後になるものと考えられるが、畦の区画が明確でないため確定できない。調査区北寄りの4号畦、5号畦で区画される水田面及び調査区南寄りの9・10・11号畦で区画される水田面は南北幅が狭く、東西に長い形態を示す。

検出畦の概要は次のとおりである。

1号畦	＝幅0.7～0.8m、高さ3cm
2号畦a	＝幅0.9～1.0m、高さ3cm
2号畦b	＝幅1.1～1.2m、高さ4cm
2号畦c	＝幅1.3～1.7m、高さ5cm
3号畦	＝幅0.7～1.2m、高さ6cm
4号畦a	＝幅0.9～1.2m、高さ3cm
4号畦b	＝幅0.9～1.4m、高さ3cm
5号畦a	＝幅0.8～1.0m、高さ2cm
5号畦b	＝幅0.8～0.9m、高さ2cm
6号畦	＝幅0.7～1.0m、高さ2cm
7号畦a	＝幅1.0～1.1m、高さ3cm
7号畦b	＝幅2.2～2.3m、高さ2cm
8号畦	＝幅0.9～1.4m、高さ3cm
9号畦a	＝幅1.2～1.6m、高さ2cm
9号畦b	＝幅1.2～1.3m、高さ4cm
10号畦	＝幅0.9～1.2m、高さ1cm
11号畦a	＝幅0.5～0.7m、高さ2cm
11号畦b	＝幅0.4～0.7m、高さ2cm
12号畦a	＝幅0.7～0.9m、高さ3cm
12号畦b	＝幅2.2～2.4m、高さ20cm
13号畦	＝幅1.8～3.0m、高さ10cm
14号畦	＝幅1.5～1.7m、高さ20cm

2 溝

調査区内を縦、横、斜めに走向する溝は全14条であり、すべて中世及び近世・近代・現代のもので、平安時代水田に伴うものは無い。検出した溝の概要は次のとおりである。

1号溝	＝幅1.2～2.0m、深さ0.19m、現代の側溝
2号溝	＝幅0.5～0.7m、深さ0.19m、近代～現代の溝
3号溝	＝幅0.4～1.0m、深さ0.22m、近代～現代の溝
4号溝	＝幅0.8～1.2m、深さ0.21m、現代の水路
5号溝	＝幅0.7～1.0m、深さ0.16m、近代～現代の溝
6号溝	＝幅0.8～2.4m、深さ0.26～0.3m、18世紀代の溝

7号溝	＝幅0.2～0.7m、深さ0.17m、近代の溝
8号溝	＝幅0.6～1.0m、深さ0.16m、近代の溝
9号溝	＝幅0.6～0.9m、深さ0.22m、18世紀代の溝
10号溝	＝幅0.7～1.0m、深さ0.20m、近代の溝
11号溝	＝幅0.3～0.4m、深さ0.11m、平安時代か
12号溝	＝幅0.2～0.3m、深さ0.09m、時期不詳
13号溝	＝計測不能
14号溝	＝幅0.3～0.4m、深さ0.11m、中世の溝

3 区の概要

2区の南側に続く調査区である。本調査区でも、全域にわたって浅間B軽石層を確認した。B軽石は、地表から30～50cmの位置で確認でき、約10cm前後の厚さで堆積していた。検出遺構は、このB軽石に埋没する水田と、B軽石を掘り込む溝及び土坑である。

なお、検出遺構の遺構番号は、各調査区ごとに発見順に1から起算しているため、連続する1単位の遺構であっても、検出した調査区により別な番号がついている。

3 区検出遺構の概要

1 浅間B軽石下の水田遺構

検出した水田面は、ほぼ平坦であり、北から南へ向かって緩く傾斜している。標高は調査区北部の地点で約89.310m、南東部で約89.200m前後である。

畦は、水田面との比高が比較的明瞭なものと、低平なものがある。高いものでは5cm～7cm、低いものでは1cm前後を計測する。便宜的に交点間に付けた畦番号では9を数える。

南北畦は、東側で検出した1号・3号畦である。このうち、3号畦a北端は、東西走向の2号畦との交点付近が水口として切られている。

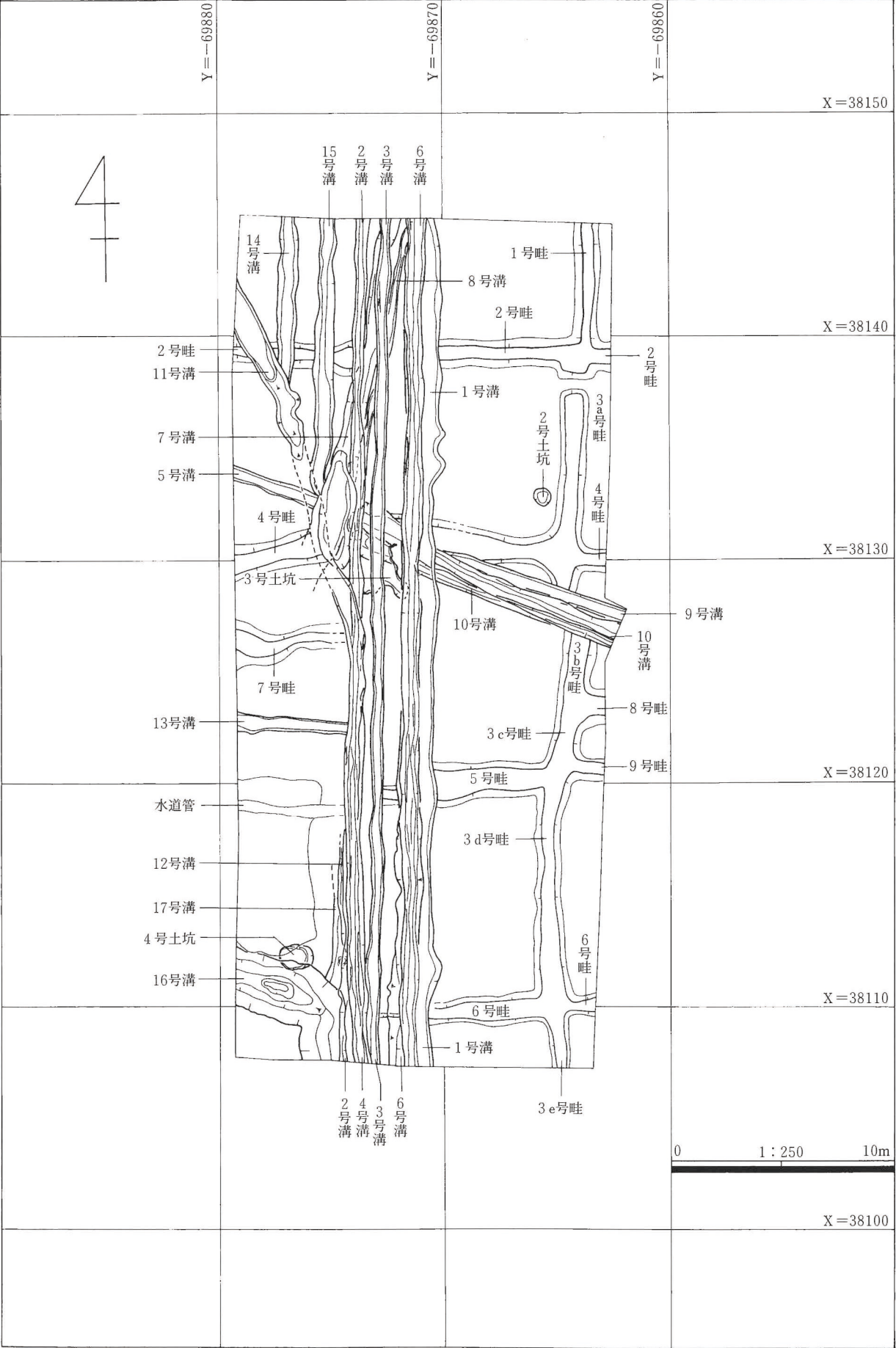
東西畦のうち、7号畦は南北方向に伸びる溝群より西側でのみ確認された畦であり、溝の東側に連続する畦が検出されなかった。8号畦、9号畦は、他の東西方向の畦と異なり、非常に間隔が狭く作られているため、間に挟まれた水田面は東西方向に細長いものとなるようである。また、9号畦は直接5号畦と連続していないため、別の畦番号を付けてカウントしている。

畦の交差は、調査区内東側中央付近8号畦がT字状に交差する他は十字状に交差する。

畦で区画される水田面は、12面前後になるものと考えられるが、畦の区画が明確でないため、確定できない。前述した8号畦の南側の水田及び、7号畦の南北の水田は東西に細長い形態を示す以外は、ほぼ正方形の形態を保っていたものと推定される。

検出された畦の概要は次のとおりである。

1号畦	＝幅1.0～1.1m、高さ3cm
2号畦	＝幅1.1～1.3m、高さ1.6～2cm
2号畦b	＝幅1.2～1.4m、高さ1.2cm
3号畦a	＝幅1.1～1.2m、高さ1.6～2cm
4号畦a	＝幅1.1～1.5m、高さ1.5cm
4号畦b	＝幅1.0m、高さ5cm
3号畦b	＝幅1.2～1.5m、高さ2.2～2.8cm



第3図 3区平面図

- 8号畦 = 幅1.5～1.7m、高さ7cm
- 3号畦c = 幅1.2～1.5m、高さ5～7cm
- 5号畦 = 幅0.8～1.8m、高さ3cm
- 3号畦d = 幅0.9～1.0m、高さ5.4cm
- 9号畦 = 幅1.0～1.5m、高さ3.3～11cm
- 6号畦a = 幅1.0～1.4m、高さ4cm
- 6号畦b = 幅1.1～1.3m、高さ1.5cm
- 3号畦e = 幅0.7～0.9m、高さ1.6～2cm
- 7号畦 = 幅0.8～1.1m、高さ1cm

2 溝

調査区内を縦、横、斜めに走向する溝は全17条で、すべて中世及び近世、近代、現代のもので、平安時代水田に伴うものはない。検出した溝の概要は次のとおりである。

- 1号溝=幅1.2～1.8m、深さ0.43m、現代の側溝
- 2号溝=幅5.0～1.2m、深さ0.19m、近代～現代の溝
- 3号溝=幅0.3～0.6m、深さ0.1～0.2m、現代の溝
- 4号溝=幅0.5～0.9m、深さ0.10m、近代～現代の水路
- 5号溝=幅0.5～1.2m、深さ0.38m、18～19世紀代の溝
- 6号溝=幅0.7～1.2m、深さ0.26～0.3m、現代の水路
- 7号溝=幅0.7～1.0m、深さ0.19m、18～19世紀代の溝
- 8号溝=幅0.3～0.5m、深さ0.14m、18世紀代の溝
- 9号溝=幅0.7～0.8m、深さ0.22m、中世か
- 10号溝=幅0.3～0.5m、深さ0.28m、18世紀代の溝
- 11号溝=幅0.5～0.9m、深さ0.21m、近代～現代の溝
- 12号溝=幅不明、深さ0.12m、近代～現代か
- 13号溝=幅0.5～0.8m、深さ0.14m、時期不詳
- 14号溝=幅0.7～0.9m、深さ0.11m、中世の溝
- 15号溝=幅0.7～0.9m、深さ0.12m、中世の溝
- 16号溝=幅1.9～2.8m、深さ0.62～1.12m、18～19世紀の溝
- 17号溝=幅0.7～0.9m、深さ計測不能、17～18世紀代の溝か

3 区第2面

本調査区では、前述した浅間B軽石下水田の下層の土層把握のために設定した断ち割りトレンチで検出可能な面が確認できたため、発掘調査を実施した。

前述したB軽石下水田面から第2面検出面までの覆土及び遺構が掘削している地山の基本土層は、以下の通りである。

1. 黒褐色 (10Y R3/1) 土層…層厚4～5cm、粘土粒、本層上面がB軽石下水田面
2. 暗灰色 (N3/) 土層…層厚10～12cm、粘土粒、大粒のC軽石が混在する
3. 黒色 (7.5Y2/1) 土層…層厚4～5cm、粘土粒、やや多量のC軽石が混在する

(本層上面が第2面遺構確認面である)

4. 黒色 (N1.5/) 土層…層厚5～8cm、粘土粒を含む。明褐色の植物遺体が見られる
5. 混土層…黒色 (N1.5/) 土と淡黄色 (5Y8/3) 土が混在。粘性高い。植物遺体が混在する。検出された溝は、本層まで達している。

上記3層で検出された遺構は、畦と考えられる帯状の高まり2本と溝1条である。

遺構検出面の標高は、調査区北部で約89.170m、南東部で約89.000mである。これらの遺構は、全て浅間B下水田が作られた以前に存在したものである。

1 水田遺構

検出された畦は、東西走向するもの (1号畦) と北西～南東に走向するもの (2号畦) の2本である。両畦ともに確認できたのは調査区西壁付近で、東及び南東方向へ展開するかどうかについては不明瞭であった。畦の高さは2～3cm前後と、あまり高いものではない。また、遺物も若干出土しているが、全て埋土に混在するもので、時期決定可能なものは見られない。

検出された畦の概要は次のとおりである。

1号畦＝幅0.9～0.98m、高さ2.5～3.5cm

2号畦＝幅0.7～0.9m、高さ1.8～3.6cm

2 溝

調査区北壁中央から東壁にかけて、部分的に南西側に湾曲して張り出すが全体としては北西～南東に走行する。埋土は2層に分層できる。最下層は2～3cmほど大量に浅間C軽石が混在する黒色土で、上記の4層 (黒色土) に似ている。その上層に黒色土が少量混在する、榛名FAが堆積している。この埋土が遺構確認の指標となった。検出された溝の概要は次の通りである。

1号溝＝幅0.28～0.84m、深さ10～14cm

本調査区で検出された畦は水田と考えることが妥当であるが、2本検出された畦以外に水田耕作を裏付ける遺構は検出されなかった。また、畦と溝との関係は、両遺構に共通する1次的な覆土が見られず、再堆積の混土層ある点からみて、遺構面が削平を受けた結果と見られるため、有機的に関係付けて考えることはできない。

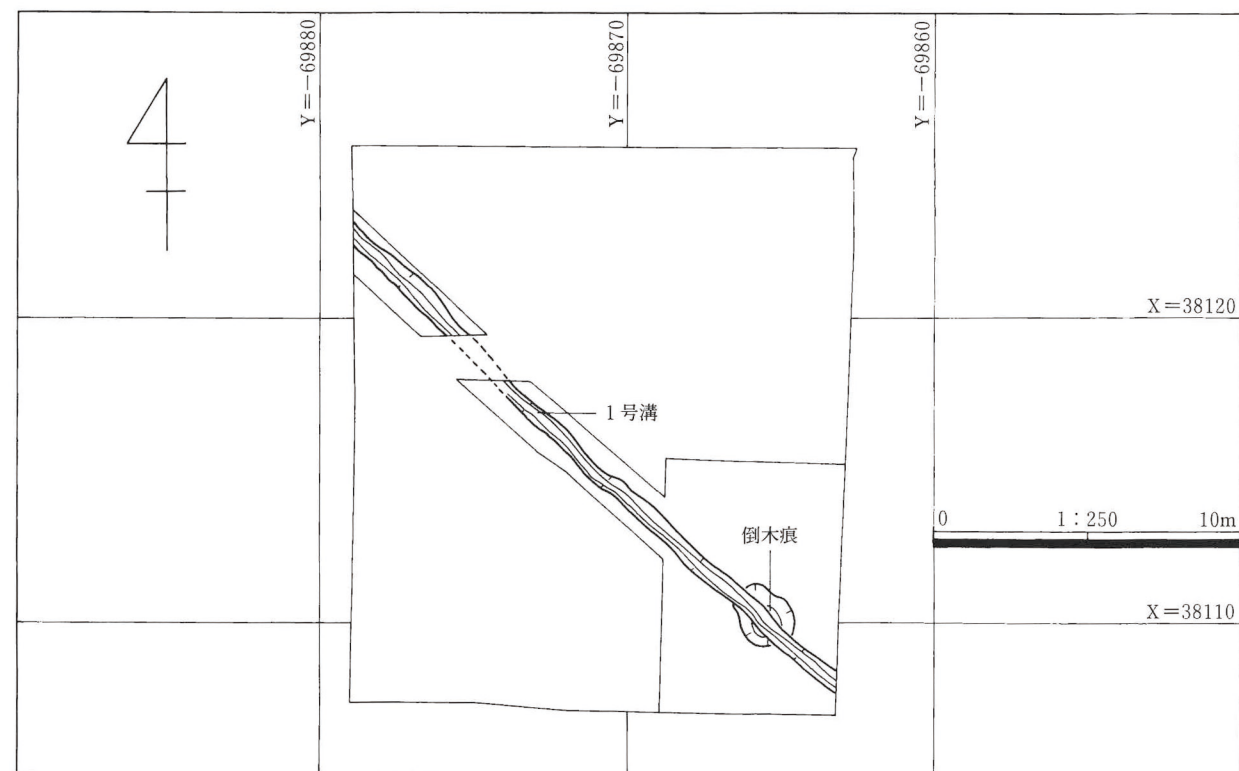
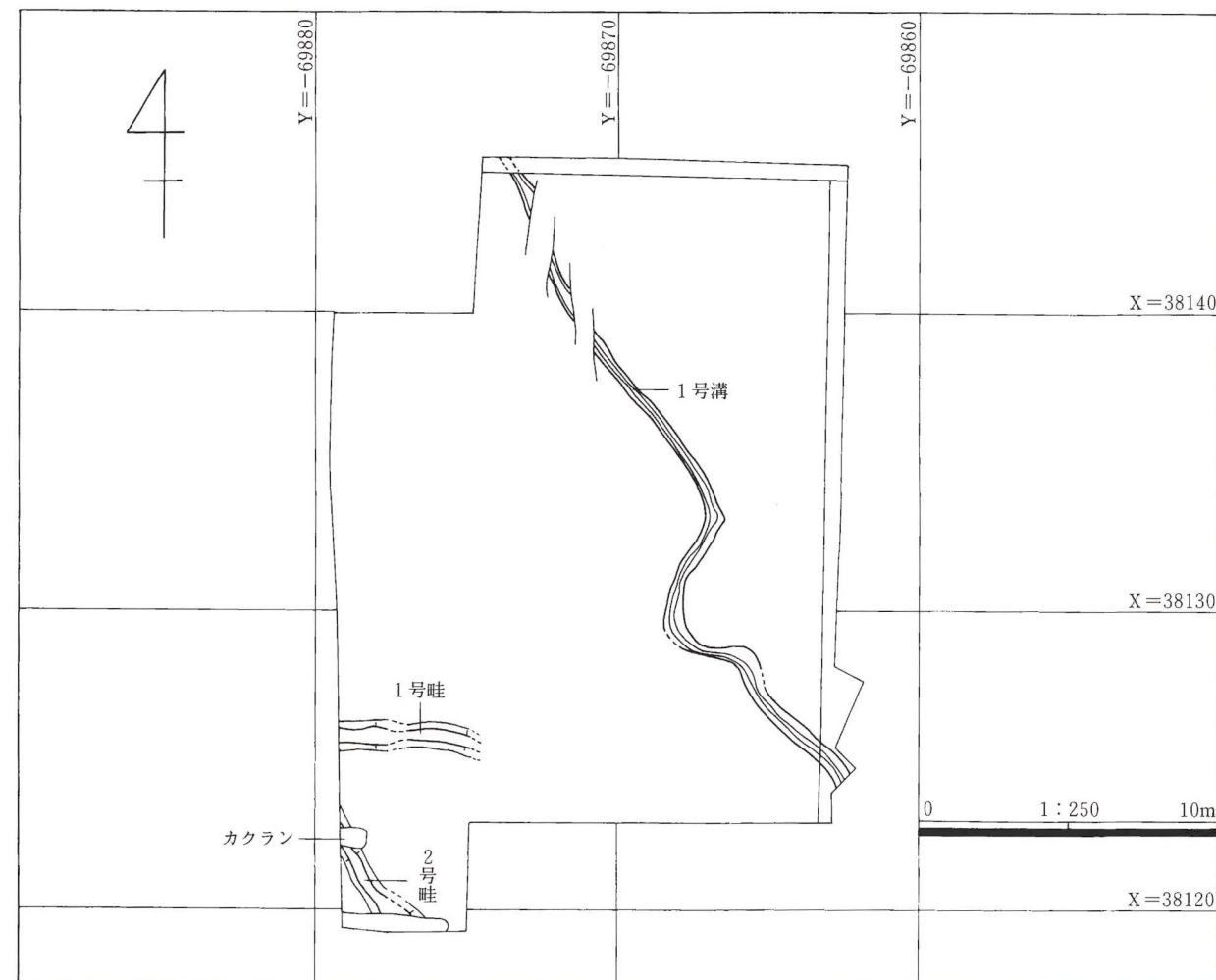
遺構確認面はほぼ平坦で、北から南へ緩く傾斜している点は、浅間B軽石下水田面を検出した上面に似ているが、調査区の中央付近が若干緩く窪んでおり、もう少し広い範囲で考えると、若干窪み気味な小規模の地形の一部分になる可能性があると考えられる。

3区第3面

本調査区は、断ち割りトレンチで浅間B軽石下水田面の下層に検出可能な面として確認できる混土層の面を発掘調査した。この面が当遺跡の第3面となる。

前述した第2面水田面から第3面検出面までの覆土及び遺構を掘削している地山の基本土層は以下のとおりである。

1. 黒褐色 (10Y R3/1) 土層…層厚5～6cm、粘土粒を含む。本層上面が浅間B水田面



第4図 3区2面・3面

2. 暗灰色（N3／）土層・・・層厚 7～10cm、粘土粒を含み、大粒の浅間C軽石が混在する
3. 黒色（7.5Y2／1）土層・・・層厚 4～5 cm、粘土粒を含み、少量の浅間C軽石が混在する。本層上面が第 2 面遺構確認面となる
4. 黒色（N1.5／）土層・・・層厚 5～10cm、粘土粒を含み、浅間C軽石を少量混在する。明褐色の植物遺体が混在している
5. 黒色（N1.5／）土層・・・層厚13～15cm、粘土粒を含み、淡黄色（5Y8／3）シルトが混在する。本層上面が、第 3 面遺構確認面となる
6. シルト漸移層・・・黒色（N1.5／）土と淡黄色（5Y8／3）シルトが混在。検出した溝は本層まで達している

上記 5 層で検出した遺構は、溝 1 条及び倒木痕 1 である。遺構検出面の標高は、北部で約88.90m、南東部で約88.70mである。

1 溝

3 区西壁中央南よりから東壁南端にかけて、直線的に走行する。埋土は 2 層に分層できる。上層は、17～20 cmほどの厚さで、淡黄色（5Y8／3）土が混在する層があり、下層には黒色（N1.5／）土中に少量のシルト質粘土が混在する。

検出された溝の概要は次のとおりである。

1 号溝＝幅0.38～0.62m、深さ25～35cm

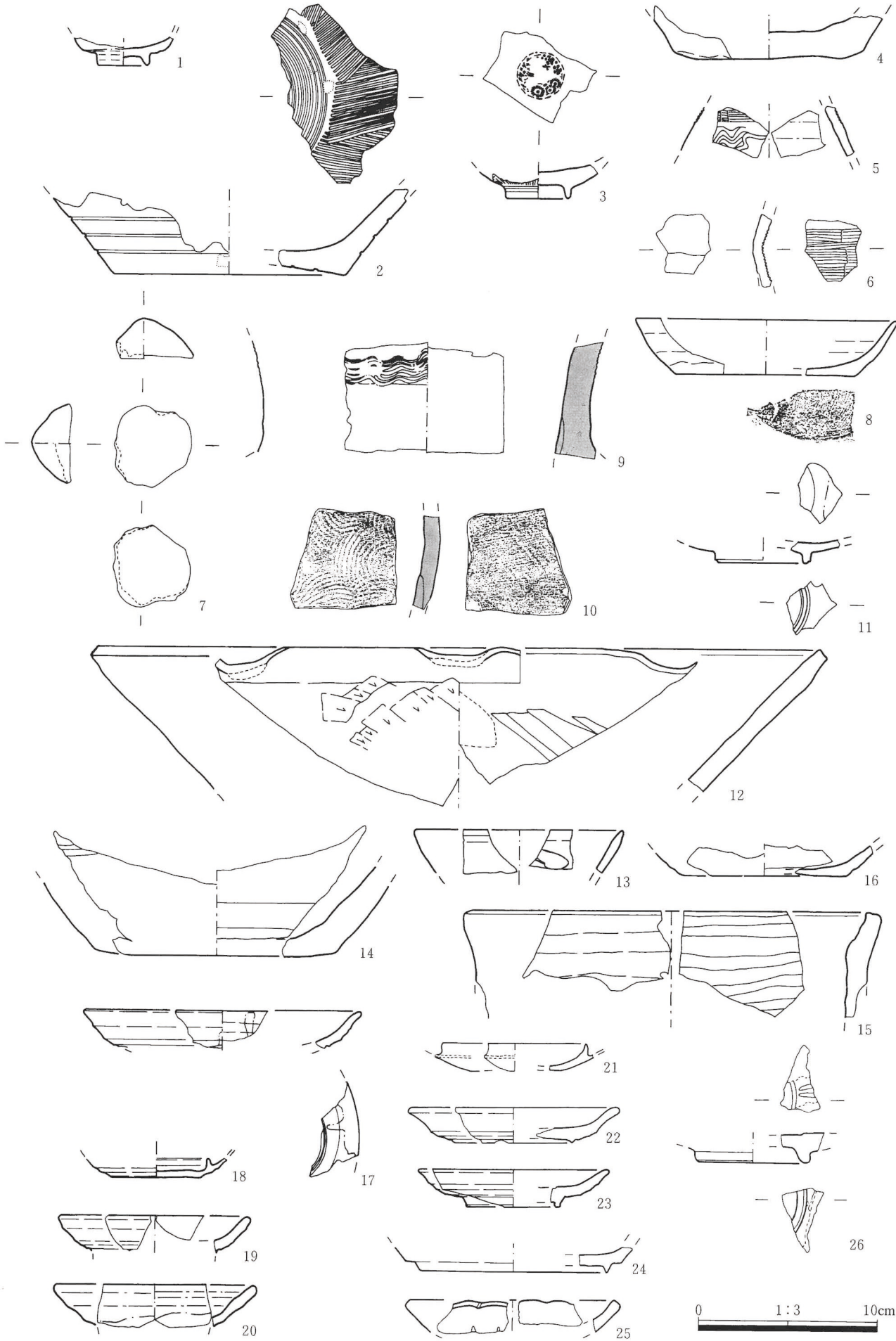
出土遺物は埋土に混在するもので、時期決定可能なものは見られない。

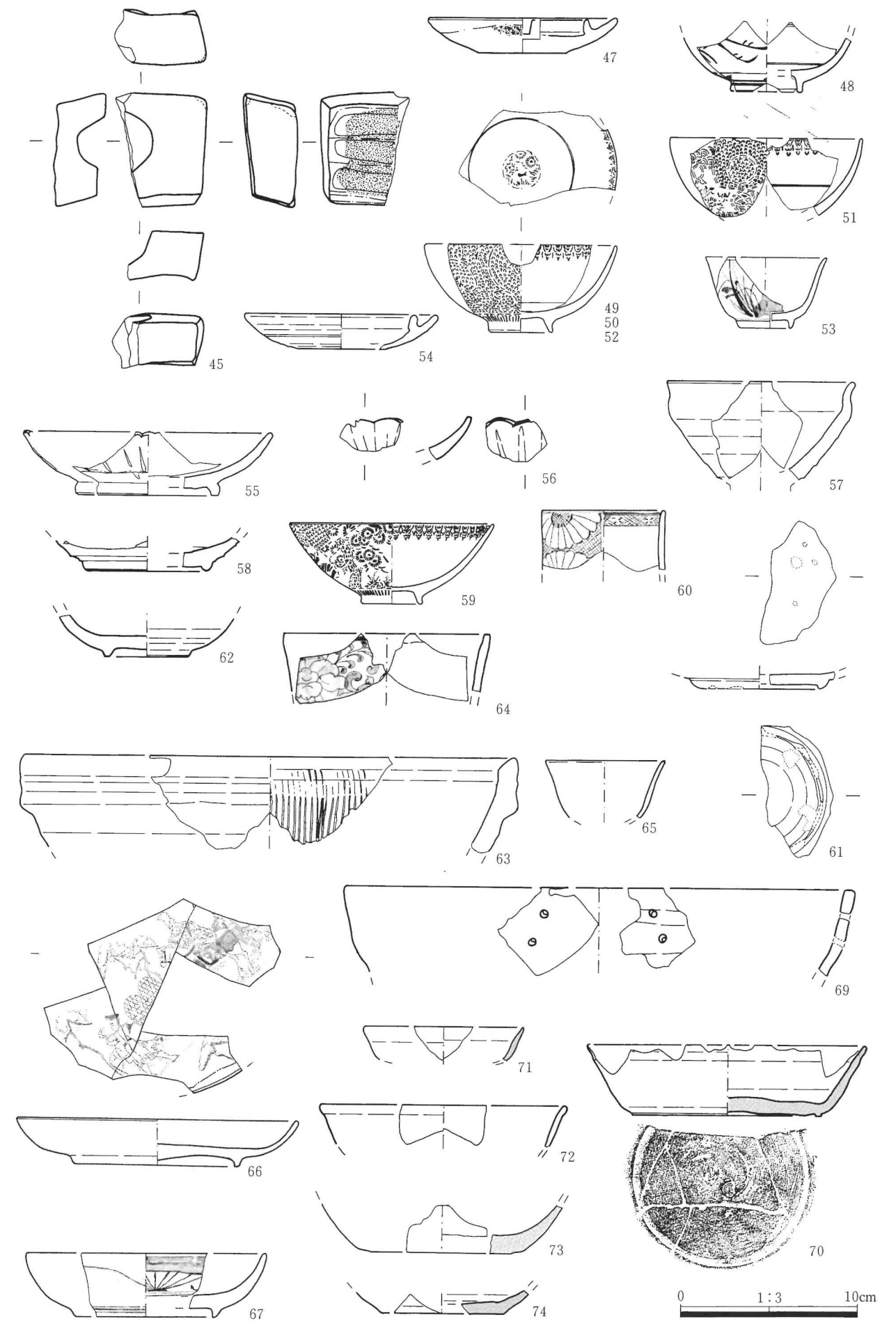
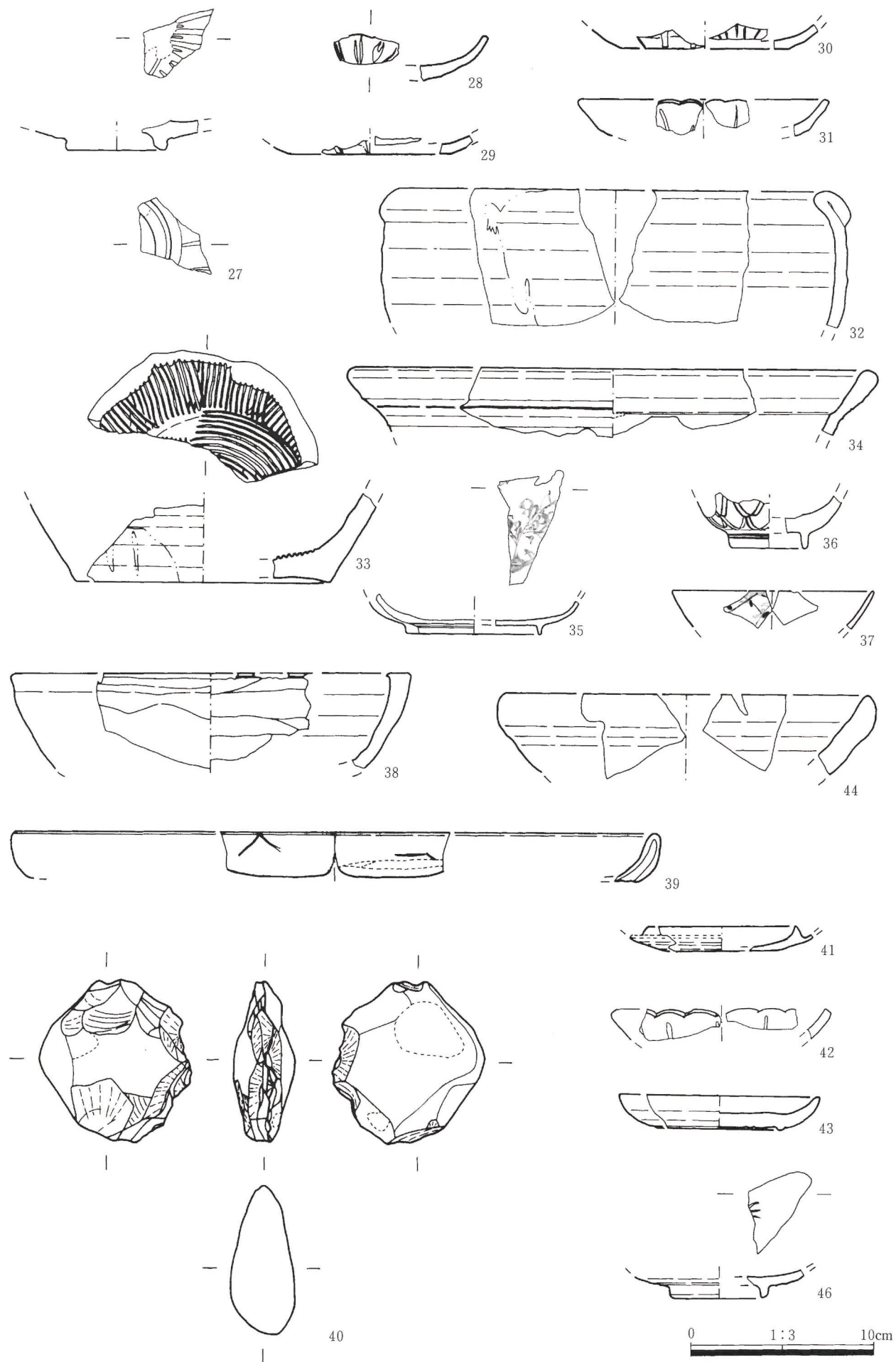
2 倒木痕

調査区南東隅で検出された。1 号溝と重複関係にあり、倒木痕の方が古い。平面形は西洋ナシ形の楕円形で、長軸はおよそN－45°－Wである。規模は北西－南東が2.1m、北西－南西が0.78m、深さ約50cm。淡黄色あるいは明黄色のシルトロームが上層に浮き上がり、逆転した黒色土が下層に入り込む堆積状況である。時期については明らかではない。

遺物出土地点一覧表

遺物番号	区	遺構名	遺物番号	区	遺構名
1～3	1 区	6 号溝	53	3 区	3 号溝
4～15	1 区	8 号溝	54～58	3 区	5 号溝
16	1 区	第 1 断ち割り	59～60	3 区	7 号溝
17～40	2 区	6 号溝	61～69	3 区	16号溝
41	2 区	8 号溝	70	3 区	第 2 断ち割り
42～43	2 区	9 号溝	71～72	3 区 2 面	2 トレ遺構外
44	2 区	遺構外	73	3 区 2 面	3 トレ遺構外
45	3 区	1 号溝	74	3 区 2 面	2 トレ
46～52	3 区	2 号溝			



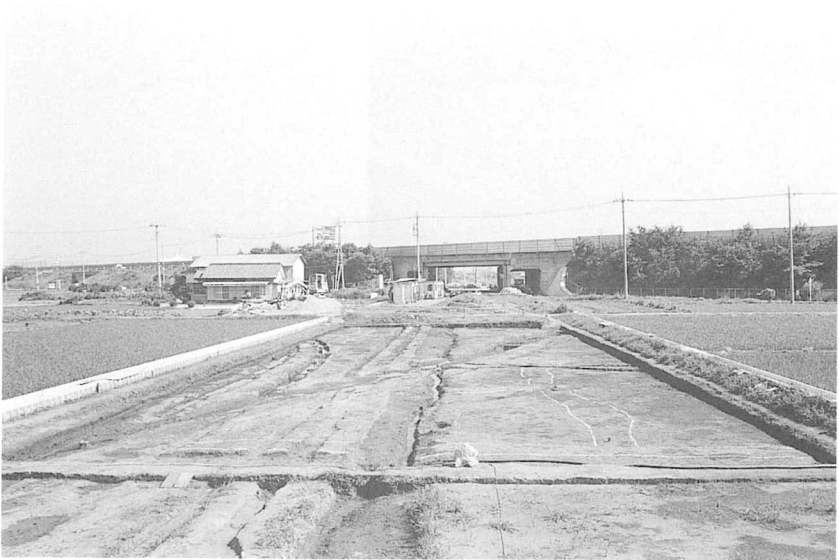


報告書抄録

フリガナ	シマノヒトツヤヒガシイチイセキ
書 名	島野一ツ谷東Ⅰ遺跡
副 書 名	都市計画道路南八幡京ヶ島線(京ヶ島工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	高崎市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第150集
編・著者名	久保泰博・曾江哲也
編集機関	高崎市教育委員会
編集機関所在地	〒370－8501 群馬県高崎市高松町1番地
発行年月日	平成9年(1997年)3月31日
発行機関	高崎市教育委員会

フリガナ		シマノヒトツヤヒガシイチイセキ					
所収遺跡名		島野一ツ谷東Ⅰ遺跡					
フリガナ		ゲンマケンタカサキシシマノマチヒトツヤヒガシ					
所収遺跡所在地		群馬県高崎市島野町一ツ谷東1080、1080A、1082、1084、1092、1093					
市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査開始	調査終了	調査面積	調査原因
10202	265			H7.5.26	H8.3.25	2,176㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主	特記事項
島野一ツ谷東Ⅰ遺跡	生産遺構	平安時代	水田	陶磁器・銭	ほぼ東西南北方向の畦が検出された
		近世	溝		



1区(南から)



2区畦(北から)



2区畦(南から)



3区1号溝



3区16号溝漆器碗



3区16号溝木板

高崎市文化財調査報告書第150集

島野一ツ谷東Ⅰ遺跡

都市計画道路南八幡京ヶ島線(京ヶ島工区)
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1997年3月31日 印刷

1997年3月31日 発行

編集 高崎市教育委員会

発行 高崎市教育委員会

印刷 杉浦印刷株式会社

